



Japan Foundation for
Regional Art-Activities

地域創造レター

News Letter to Arts Crew

2月号—No.369

2026.1.25

(毎月1回25日発行)

【熨斗目花色(のしめはないろ)】灰味の強い青色。

藍染めの熨斗目色から派生した色名で、熨斗目色より濃い灰味がかかった青を熨斗目花色、薄い緑味がかかった青を熨斗目浅葱と言う。そもそも熨斗目は、縦糸に生糸、横糸に練糸を用いた縞や段の模様のある織物のことだったが、江戸時代に青色の大胆な横縞入りの小袖が武士の礼服の定番となったことから、そのデザインを熨斗目、色を熨斗目色と呼ぶようになった。

●目次／contents

今月のニュース..... 2

令和7年度「地域創造大賞(総務大臣賞)」受賞施設決定／表彰式

令和6・7年度「公立美術館共同巡回展開催助成事業」報告

財団からのお知らせ..... 6

「公共ホール音楽活性化事業(導入プログラム)」2027・2028年度登録アーティスト募集／令和7・8年度「公共ホール創造ネットワークモデル事業」(長野県)アウトリーチ実施報告

今月の情報..... 7

地域通信／アーツセンター情報

調査研究事業報告..... 14

2024年度「地域の公立文化施設実態調査」③ 美術館ほか

今月のレポート..... 16

沖縄県那覇市 那覇文化芸術劇場なはーと プレヒト×沖縄芝居新作プロジェクト2023-2025 沖縄芝居『花染小の美ら姉』

●令和7年度「地域創造大賞(総務大臣賞)」

5館の受賞が決定し、表彰式を開催

令和7年度
地域創造大賞
(総務大臣賞)
受賞施設決定/
表彰式



左: 橋本憲次郎総務省大臣官房審議官による受賞施設への表彰状の授与/右: 受賞施設関係者、審査委員との記念撮影

地域創造大賞(総務大臣賞)は、地域における文化・芸術の振興による創造性豊かな地域づくりに特に功績のあった公立文化施設を顕彰する総務大臣賞として創設されたもので、これまでに148施設が表彰されました。22回目となる令和7年度は全国から5施設(右頁参照)の受賞が決定し、1月16日、グランドアーク半蔵門(東京都千代田区)で橋本憲次郎総務省大臣官房審議官のご臨席の下、表彰式が行われました。

主催者である地域創造の河内隆理事長の挨拶、受賞施設の多彩な取り組みの紹介に続き、橋本大臣官房審議官から表彰状が授与され、「受賞された皆様の活動は、活力ある地域社会の実現に大きく寄与するものであり、今後とも、全国のモデルとして、地域の暮らしをより心豊かなものにする文化・芸術の振興に、お力添えを賜りますようお願い申し上げます」と林芳正総務大臣の祝辞が披露されました。

続いて受賞施設を代表し、「演劇のまちづくり」を推進したことが評価された七尾市中島文化センター(能登演劇堂)の設置団体である石川県七尾市の茶谷義隆市長より、「七尾市中島文化センターは、『能登演劇堂』を併設する複合施設となっており、演劇文化によるまちづくり事業を行い、文化及び芸術の振興により心豊かな地域社会の創造に寄与することを目的に、優れた舞台芸術の公演や青少年の演劇文化活動支援などを行っております。能登演劇堂は、国際的な俳優、故・仲代達矢氏の監修のもと、自然と舞台が一体となる空間を創り上げ、平成7年に開館した演劇専用ホールです。

(中略)開館以来、舞台公演に加え、小中学校を対象とした演劇ワークショップを通して文化芸術の魅力を広く発信し、さらには、震災後の『心の復興』をめざした地域交流や復興祈念公演などにも取り組み、文化の力で地域を元気にする活動を続けております。今後も舞台芸術を通じて地域コミュニティを育み、芸術の力を通じて人々の心を豊かにし、地域文化や能登の魅力を全国に発信する拠点として、さらなる挑戦を続けてまいります」という今後への決意を込めた謝辞をいただきました。

最後に、地域創造大賞審査委員会の吉本光宏委員長から受賞施設への講評をいただくとともに、「七尾市、京都市、福山市、那珂川市の4つの文化施設は、いずれも30年間、事業や運営を継続されてきました。秋田市文化創造館は2021年の開館ですが、再利用した旧・秋田県立美術館が1967年の開館だったことを考えると、60年近く地域の文化拠点として機能してきたことになります。審査委員会は、地方公共団体が設置・運営する公立文化施設を取り巻く環境が厳しさを増すなか、皆さんが長きにわたってそれぞれの地域で文化活動を支え、芸術を提供してきたことに敬意を表するとともに、その歴史をさらに積み重ねていただきたいと願っています」と今後への期待が寄せられました。

今回の賞は、受賞された施設のみならず、日頃からそれらの施設を支え、文化・芸術による地域づくりに参加いただいている地域の皆様のご協力に対する感謝を込めて贈られるものです。心よりお祝い申し上げます。

●地域創造大賞審査委員会
(※委員長、委員長代理以下、五十音順)
◎委員長
吉本光宏[(同)文化commons研究所 代表・研究統括]
◎委員長代理
坪池栄子[(株)文化科学研究所 編集プロデューサー]
◎委員
河内隆[(一財)地域創造 理事長]
小林真理[東京大学大学院人文社会系研究科 教授]
仲道郁代[ピアニスト]
柳沢秀行[(公財)大原芸術財団 シニアアドバイザー]
若林朋子[プロジェクト・コーディネーター/立教大学大学院社会デザイン研究科特任教授]

●地域創造大賞に関する問い合わせ
総務部 山下
Tel. 03-5573-4054

▼— 今月のニュース

地域創造からのニュースを毎月掲載します

令和7年度

「地域創造大賞(総務大臣賞)」受賞施設

秋田市文化創造館 | 秋田県秋田市

“市民の創意を育む”文化交流施設の新境地

市民の創意と発意で“利用目的をつくっていく場”として旧・秋田県立美術館の建物を再利用。秋田公立美術大学の学外組織であるNPO法人アーツセンターあきたが運営。何かを語りたい人が店主となる「カタルバー(場)」、市民がやってみたいことを実際に試みる「チャレンジマー



ケット」、コーディネーターによる「そうだん会」を行うなど、新たな文化交流のあり方を提示した。

[運営]NPO法人アーツセンターあきた

[開館]2021年

七尾市中島文化センター(能登演劇堂) | 石川県七尾市

“演劇のまちづくり”を推進

人口8,000人余りの旧・中島町が国際的な俳優の仲代達矢率いる無名塾の合宿地であった縁を生かして建設した日本屈指の演劇専用劇場。友の会等の支えにより活動が続け、無名塾ロングラン公演をはじめとした多彩な演劇鑑賞の機会を提供。七尾東雲高等学校演劇科の



創設、演劇を学ぶ大学生の滞在制作、七尾市民劇団など、30年にわたって演劇のまちづくりを推進した。

[運営]公益財団法人演劇のまち振興事業団

[開館]1995年

京都コンサートホール | 京都府京都市

音楽文化により“文化芸術都市”を牽引

国内外の演奏家による質の高いコンサートを実現。京都市交響楽団の本拠地として、楽団と協働したジュニアオーケストラの育成、関西8大学が集うオーケストラ・フェスティバル、0歳からのコンサート、市内各所での無料コンサート、京都ゆかりの若手演奏家によるアウトリーチや



バリアフリーコンサートなど、クラシック音楽の包括的な活動により、30年にわたり文化芸術都市・京都を牽引した。

[運営]公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団

[開館]1995年

ふくやま芸術文化ホール(リーデンローズ) | 広島県福山市

“文化のホームグラウンド”として尽力

ばら公園や箏の生産で知られる福山の「ばらのまち福山 国際音楽祭」「全国小・中学生箏曲コンクール」の主会場として親しまれてきた文化振興の拠点。2007年から小中学生を対象にした登録演奏家によるアウトリーチ「音楽宅配便」を実施。開館30周年を機にスタートした「オーケス



トラ福山定期」に全中学2年生を無料招待するなど、音楽による地域づくりに貢献した。

[運営]公益財団法人ふくやま芸術文化財団

[開館]1994年

ミリカローデン那珂川 | 福岡県那珂川市

“第三の居場所”として地域に活力

文化ホール・図書館・生涯学習センターなどの複合文化施設。開館30年を迎えるにあたり老朽化した施設・事業内容を再構築。那珂川市少年少女合唱団、那珂川吹奏楽団、なかがわe-スタジオ(市民劇)という支援団体に加え、年齢・ジャンルを問わず参加する「MIRIKAダンスフェスタ」、小中学生が対象の「ミリカ部活」、エントランスでのイベントなどに取り組み、市民の交流と成長を図る第三の居場所として再生した。



[運営]公益財団法人那珂川市教育文化振興財団 [開館]1994年

●令和6・7年度「公立美術館共同巡回展開催助成事業」

漫画草創期に活躍した作家を紹介する巡回展を助成

令和6・7年度 公立美術館共同 巡回展開催助成 事業



写真

- 1: 展示風景 (勝央美術文学館)
- 2: 地域交流プログラム「これが漫画!展」のグッズを手作りしよう! (湯前まんが美術館)
- 3: ギャラリートーク(合志マンガミュージアム)
- 4: 地域交流プログラム「保存修復技術を学んでフォトブックを作ってみよう」 (横山隆一記念まんが館)

●令和6・7年度公立美術館共同巡回展開催助成事業(2か年)

「これが漫画!展 日本の漫画を創った時代～楽天・隆一・良輔～」

[主催]近現代漫画家記念館共同巡回展実行委員会

[展覧会アドバイザー]伊藤遊(京都精華大学国際マンガ研究センター 特任准教授)、新美琢真(京都国際マンガミュージアム 学芸室員)

[会場]湯前まんが美術館(熊本県湯前町)、合志マンガミュージアム(熊本県合志市)、横山隆一記念まんが館(高知県高知市)、勝央美術文学館(岡山県勝央町)
[助成](一財)地域創造

●公立美術館活性化事業に関する問い合わせ

総務部 高野
Tel. 03-5573-4056

令和6・7年度公立美術館共同巡回展開催助成事業「これが漫画!展 日本の漫画を創った時代～楽天・隆一・良輔～」が、湯前まんが美術館(5月24日～7月6日)、合志マンガミュージアム(8月1日～8月28日)、横山隆一記念まんが館(9月13日～11月4日)、勝央美術文学館(11月15日～11月30日)にて開催されました。公立美術館共同巡回展企画支援事業(以下、企画支援事業)を経て、令和5年度から3年間にわたり支援し、実施に至った展覧会です。

今や日本を代表するコンテンツとなった「マンガ」ですが、この巡回展では、明治・大正・昭和に活躍した日本の漫画の草創期を生きた漫画家たちに焦点を当てました。中でも、日本初の「職業漫画家」といわれる北沢楽天、戦前・戦後にかけて日本の漫画界を牽引した「漫画集団」の設立メンバーの一人であり、昭和期に国民的人気を誇った漫画『フクちゃん』の生みの親である横山隆一、毎日新聞における40年にも及ぶ風刺漫画連載をはじめ、ユーモアと強いジャーナリズム精神をもって戦後日本を批評し続けた那須良輔、この3人の作品を通して、ストーリーマンガ発展以前の日本の漫画の歴史

を振り返り、再評価を試みる巡回展となりました。

●巡回展の自主企画を助成とアドバイザー派遣でサポート

この巡回展は、湯前まんが美術館の中尾章太郎さんが学芸員として初めて企画したものです。応募にあたっては、2館以上という要件があったため、同じく昭和に活躍した漫画家を顕彰する漫画記念館と連携することで相乗効果が生まれると考え、面識のなかった横山隆一記念まんが館へ今回の巡回展の企画を売り込みに行かれたそうです。応募当初は地域おこし協力隊として美術館に来たばかりだった中尾さんは「展覧会を企画することも初めてで、巡回展の実施もこれまで経験がなかったが、地域創造の事業を活用してチャレンジすることができた」と話してくれました。

企画支援事業は、公立美術館が実施する自主企画巡回展への助成制度である公立美術館共同巡回展開催助成事業(以下、公美巡)への申請を目指して、調査研究や学会会議、巡回先探しに係る経費(旅費、参考文献の購入、

写真撮影費など)を助成するものです。

そのほか、支援内容のひとつとして、希望に応じてアドバイザーの派遣も行っており、京都精華大学国際マンガ研究センター特任准教授の伊藤遊さんに今回の巡回展のアドバイザーにご就任いただきました。また、伊藤さんのご推薦にて、京都国際マンガミュージアム学芸室員の新美琢真さんにも定期的な企画会議にご参加いただき、検討を進めてきました。新美さんの派遣費用については、湯前町の予算にて行いましたが、こうした学芸会議関係の経費についても助成対象とすることができるのも本事業の魅力のひとつです。漫画の研究者であり数多くの展覧会も手がけている両氏からの出品作品の検討や、展示構成についての具体的なご助言は、参加館の学芸員にとって心強かったようです。

また、公美巡には3館以上で申請する要件があるため、地域創造の支援のひとつとして、地域創造レター内での告知記事を出すなど参加館探しもお手伝いしています。公美巡に採択された令和6年度からは、合志マンガミュージアム、勝央美術文学館にもご参加いただけることになり、4館で巡回展の準備作業を行いました。準備年度は、企画案を基に、作品リストの確定や、輸送計画の策定、図録制作などを実行委員会として進め、巡回展開催に向けた具体的な作業に移ります。そして、令和7年度(公美巡開催年度)に満を持して巡回展を開幕することができました。

●2年間の調査、準備を経て待ちに待った巡回展の開幕

総合開会式は、実行委員会の事務局でもある湯前まんが美術館で5月24日に行われました。「まちづくりの核となり、町民文化の発展に寄与する施設」として1992年に開館した湯前まんが美術館を中心に、漫画によるまちづくりを早くから実行してきた湯前町。当日は、地元のメディアも取材に入り、開会式直後に行われた担当学芸員たちのギャラリートークにはたくさんの方々にお集まりいただき、地域での美術館への関心の高さがうかがえました。展覧会

は3章構成(第1章「近代漫画の胎動」、第2章「戦争と漫画」、第3章「漫画集団の発足」)で貴重な資料や原画などが展示され、明治から昭和にかけての漫画家たちの活躍がわかりやすく紹介されました。

●鑑賞をサポートする交流プログラムも準備

また、地域創造の美術館事業では、展覧会の開催のみならず、企画内容に即したワークショップ等の地域交流プログラムも実施しています。横山隆一記念まんが館では、出品作品の修復に当たられた紙本保存修復家の一宮佳世子さんを講師に迎え、「保存修復技術を学んでフォトブックを作ってみよう」というワークショップを10月11日に開催しました。

出品作品の修復の様子について、実際の写真も見ながら説明を聞いたのち、修復技術に応用して和紙を使った制作を行います。参加した方は一宮さんにコツを教えてもらいながら、制作に打ち込んでいました。一宮さんのお話を伺った後で展覧会場の作品を見ると、「この箇所が修復されたところだ」といつもと視点も変わり、細かなところまでじっくりと鑑賞できる良いきっかけとなりました。

会場となった横山隆一記念まんが館の学芸員・大野雅泰さんは「自主企画としての巡回展は初の試みで大変な面もあったが、通常より長く2年かけて準備ができたので、調査が進んだ。漫画の資料は、日本各地で分散しており連携が難しかったが、この巡回展でネットワークができたことは良かった」と話してくれました。横山隆一記念まんが館以外でも、各館で参加者と交流しながらのギャラリートークや、オリジナルグッズを作るワークショップなどが開催されました。

この巡回展のように、自主企画の巡回展にチャレンジしてみたい学芸員の方は、企画支援事業、公美巡2か年プログラムをぜひご活用ください。令和9・10年度公立美術館活性化事業への申請は、令和8年6月頃を目処に行う予定です。地域創造ホームページをご確認の上、ふるってご応募ください。

▼財団からのお知らせ

地域創造からのお知らせを毎月掲載します

財団からのお知らせ

●公共ホール音楽活性化事業に関する問い合わせ

芸術環境部 金山・北川
Tel. 03-5573-4168
onkatsu@jafra.or.jp

●公共ホール創造ネットワークモデル事業に関する問い合わせ

芸術環境部 渡邊・今野
Tel. 03-5573-4143

●「公共ホール音楽活性化事業(導入プログラム)」2027・2028年度登録アーティスト募集

この事業は市町村等の公共ホールに、オーディションで選ばれた演奏家とコンサートの企画制作経験が豊富なコーディネーターを派遣し、地方公共団体等と共催でコンサートとアクティビティ(アウトリーチをはじめとする演奏交流プログラム)を実施する事業です。2027・

2028年度の事業実施に向けて登録アーティストを募集します。事業の趣旨にご賛同いただける新進アーティストのご応募をお待ちしております。また、公立文化施設等の担当者の方々には、地域で活躍するアーティストをご紹介いただけますと幸いです。

◎募集ジャンル

ピアノ、弦楽器(ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロ、コントラバス、クラシック・ギター、ハープ)、管楽器(フルート、オーボエ、クラリネット、ファゴット、サクソフォン、ホルン、トランペット、トロンボーン、ユーフォニアム、チューバ)、声楽(ソプラノ、メゾソプラノ、アルト、テノール、バリトン、バス)、打楽器(マリンバ含む)、クロマティックハーモニカ、クラシックアコーディオン

◎応募条件

[ソリスト]

●年齢条件

声楽以外: 2027年4月1日時点で満20歳以上35歳以下
声楽: 2027年4月1日時点で満20歳以上40歳以下
[アンサンブル]

●編成条件

五重奏まで(登録後のメンバーの変更はできません)

●年齢条件

平均年齢35歳以下。ただし、満20歳以上37歳以下で構成されていること(2027年4月1日時点)

◎募集数

5名(組)程度

◎審査日程

●第1次選考: 書類と音源(YouTube)による予備審査

●第2次選考: ライブ演奏およびトークによる本審査

[日程]2026年6月15日(月)、16日(火)

[会場]TOPPANホール

[審査員]佐渡裕、渡辺健二、山崎伸子、杉木峯夫、入山功一、桜井しおり、仕田佳経

◎登録

合格者は、基本的な登録条件などについて合意した後、2027・2028年度の当事業のアーティストとして登録いたします。合格者対象の研修を2026年9月8日、9日に予定しております(参加必須)。

◎応募締切

2026年4月12日(日)

◎募集要項

募集要項および応募用紙は当財団ホームページに掲載しています。詳細は担当までお問い合わせください。

<https://www.jafra.or.jp/project/music/01.html>

●令和7・8年度「公共ホール創造ネットワークモデル事業」(長野県)アウトリーチ実施報告

この事業は、都道府県および市町村等の公共ホールが協働・連携して、クラシック音楽、現代ダンスまたは演劇の複数ジャンルを取り入れたプログラム制作をする2カ年事業です。1年目はアウトリーチ、2年目は作品制作および公演を実施します。

令和7・8年度の長野県における事業では、(一財)長野県文化振興事業団が中心となって、小布施町、松川村、中川村の3町村が参加し、「アートシェア信州〜ダンスと音楽がつなぐ道〜」と題して事業を進めています。令和7年度は、各地域の小・中学校でダンスと音楽によるアウトリーチ事業を実施しました。

アーティストは、長野県出身の横山彰乃さん(ダンサー・振付家)、外山賀野さん(チェロ)、海沼優衣さん(パーカッション・マリンバ)です。6月からアーティストと共に県と町村の担当者が話し合いながら、アウトリーチプログラムづくりを行い、12月に各町村にてアウトリーチを実施しました。3人のコラボパ

フォーマンスでスタートし、チェロ、パーカッション、ダンスそれぞれのパートがあり、最後に再びジャンルを掛け合わせた構成で、子どもたちは、全身で音を感じながら自由な発想で体を動かしていました。

学校の先生からは「恥ずかしがりやの子が、体を動かしてポーズまで取っていて驚いた」「普段笑わない子が笑顔を見せてくれた」などの声がありました。参加した町村の担当者からは、「アウトリーチのイメージがなかなか掴めなかったが、授業のような教わるという立場でなく、みんなで自由に表現することを楽しみ想像力が広がるような時間だった」と振り返りがあるなど、改めて文化芸術の大切さを認識しました。

令和8年度は作品を創作し、各地域のホールで公演事業を実施する予定です。作品制作に向けて、地域をリサーチしながらアーティストを中心とした各担当者とのミーティングを重ねながらプログラム構想が練り上げられ

ており、長野県の皆さんにどのような作品を届けられるのか楽しみです。



上: 3人のオープニングパフォーマンスから始まるアウトリーチの様子(中川村立中川東小学校)/下: チェロの音の振動を体感する様子(小布施子ども教室)

▼— 今月の情報

アーツセンター、アーツクルーから寄せられた情報を毎月掲載します

地域通信

●掲載情報について

最新の情報は主催者の発表情報をご確認ください。

●データの見方

情報は地域ブロック別に、開催地の北から順に掲載してあります。●で表示してあるのは開催地です。📍マークが付いている事業は地域創造の助成事業です。ラインの下は、事業運営主体、住所、電話番号、担当者名の順に記載してあります。色帯部分が事業名で、以下、内容を紹介しています。

●地域ブロック

[北海道・東北]北海道、青森、岩手、宮城、秋田、山形、福島

[関東]茨城、栃木、群馬、埼玉、千葉、東京、神奈川

[北陸・中部]新潟、富山、石川、福井、山梨、長野、岐阜、静岡、愛知

[近畿]三重、滋賀、京都、大阪、兵庫、奈良、和歌山

[中国・四国]鳥取、島根、岡山、広島、山口、徳島、香川、愛媛、高知

[九州・沖縄]福岡、佐賀、長崎、熊本、大分、宮崎、鹿児島、沖縄

●情報提供先

ファックス、電話、e-mailでお願いします。
Fax. 03-5573-4060 Tel. 03-5573-4093
letter@jafra.or.jp
芸術環境部 伊藤・中嶋

●2026年4月号情報締切

2月15日(日)

●2026年4月号掲載対象情報

2026年4月～6月に開催もしくは募集されるもの

北海道・東北

●北海道函館市

北海道立函館美術館

〒040-0001 函館市五稜郭町37-6

Tel. 0138-56-6311 耳塚里沙

<https://artmuseum.pref.hokkaido.lg.jp/hbj/>

生成する日常―道南ゆかりの作家たちによる表現

道南にゆかりのある5名の作家(早瀬龍江、深井克美、瀬戸英樹、折原久左門、小宮伸二)による、日常生活の中で揺れ動く自身の感情を表現した作品や、人々の暮らしの痕跡を描写した作品、計116点を紹介する展覧会。日用品や道南の風景などを題材とした作品もあり、作家それぞれが異なる視点で日常を表現している。作品を通して、日常のとらえ方の多様さを感じられる。

[日程]2025年12月20日～4月5日
[会場]北海道立函館美術館

●青森県十和田市

十和田市現代美術館

〒034-0082 十和田市西二番町10-9

Tel. 0176-20-1127 下山ふみ

<https://towadaartcenter.com/>

国松希根太 連鎖する息吹

彫刻家・国松希根太が奥入瀬のブナを使い、十和田で滞在制作した新作《WORMHOLE》を展示のメインに据え、近年の代表作や国松のルーツ、活動拠点の北海道・飛生に至る流れを体験できる展覧会。長い年月で独



十和田での制作風景(2025年10月4日)
撮影:小山田邦哉

自のフォルムを形成した木々に鑿(のみ)などの刃や火を入れ、大地の素材に向き合うことで生まれる国松と自然との一期一会のコミュニケーションを堪能できる。

[日程]2025年12月13日～5月10日
[会場]十和田市現代美術館

●岩手県宮古市

宮古市民文化会館

〒027-0023 宮古市磯鶏沖2-22

Tel. 0193-63-2511 大原愛

<https://iivate-arts-miyako.jp/>

三陸AIR/AIR 小野と松岡 海のものとも 山のものとも

宮古市民文化会館のアーティスト・イン・レジデンス事業に参加するアーティストが、滞在成果発表を行う「三陸AIR/AIR」。今回は、「小野と松岡」(劇作家・ドラマトゥルクの小野晃太郎と豊岡演劇祭プロデューサーの松岡大貴)が宮古市滞在のなかで感じたことを、オーディオドラマと朗読劇にして発表する。滞在期間中、小野と松岡がワークショップを行ったみやこ市民劇ファクトリーの有志が朗読劇に参加する。

[日程]2月14日

[会場]シネマ・デ・アエル

●仙台市

せんだい演劇工房10-BOX

〒984-0015 仙台市若林区卸町2-12-13

Tel. 022-782-7510 内山直子

<https://www.gekito.jp/>

演劇公演

「子育てあるある劇場2025」

「子育てあるある劇場」とは、子育て世代が演劇を通して交流できる事業として仙台市が2019年から継続している事業。児童館などで参加者から“子育てあるある”を聞き取って即興劇にするワークショップを実施し、その劇場版として、集めたエピソードを

元に創作した、身近でつい共感してしまう物語を、子どもも大人も楽しめる演劇として上演する。
[日程]1月31日

[会場]日立システムズホール仙台

●秋田県秋田市

あきた芸術劇場ミルハス

〒010-0875 秋田市千秋明徳町2-52

Tel. 018-838-5822 古谷

<https://akiat.jp/>

山形交響楽団×ミルハス 親子で楽しむクラシック

山形交響楽団が弦楽八重奏で贈る子ども参加型公演。ナビゲーターはあきた子育て応援アンバサダーを務めるフリーアナウンサーの石田鮎美。ディズニーやジブリ映画の音楽や、誰もが聞いたことのあるクラシックの名曲を演奏する。0歳から参加可能で、一緒に歌ったり手を叩いたりするコーナーも有り。

[日程]2月15日

[会場]あきた芸術劇場ミルハス

●福島県福島市

ふくしん夢の音楽堂

〒960-8117 福島市入江町1-1

Tel. 024-531-6221 半澤

<http://www.f-shinkoukousha.or.jp/ongakudou/>

古関裕而のまち「ふくしまチェンバー・ストリング・オーケストラ」コンサート2月公演

古関裕而のふるさと・福島で初のプロオーケストラとして2021年に結成された、古関裕而のまち「ふくしまチェンバー・オーケストラ」の2月公演。今回は指揮に濱津清仁を迎え、弦楽器のみで編成されたストリング・オーケストラによる公演で、ふくしん夢の音楽堂(福島市音楽堂)の響きを存分に生かした演奏を届ける。福島にゆかりある演奏家たちが紡ぐ、繊細で深い響きの音楽を味わえる。

[日程] 2月22日
[会場] ふくしん夢の音楽堂

関東

●栃木県宇都宮市

栃木県立美術館

〒320-0043 宇都宮市桜4-2-7

Tel. 028-621-3566 大城・武関

<https://www.art.pref.tochigi.lg.jp/>

僕はなに色 渡辺豊重展

—いろ、かたち、ひかりの冒険

栃木県那珂川町にアトリエを構え、明るい色彩とユーモラスなかたちが印象的な絵画や版画、彫刻など多様な作品を制作してきた渡辺豊重(1931～2023)の没後初の回顧展。2016年の個展以降に制作された作品を含む約200点を展示するほか、地域格差や社会の矛盾に対する怒りを表現した「鬼」シリーズや《モクモク》《さまざま》などの作品を多様な視点で鑑賞する体験型イベントも開催する。

[日程] 1月10日～3月22日

[会場] 栃木県立美術館

●栃木県那須塩原市

那須野が原開拓日本遺産活用推進協議会(那須塩原市・大田原市・矢板市・那須町)

〒329-2792 那須塩原市あたご町2-3 那須塩原市生涯学習課(事務局)

Tel. 0287-37-5419 高木

<https://www.city.nasushiobara.tochigi.jp/soshikarasagasu/shogaigakushuka/bunkageijutsu/2/17148.html>

日本遺産演劇「那須野が原に華ひらく～華族が夢みた大地～」

日本遺産「明治貴族が描いた未来～那須野が原開拓浪漫譚～」を題材にした演劇公演。栃木県北部の複数市町にまたがる広大な扇状地である那須野が原は、明治初期まで不毛の原野であり、その開拓史の一端を創立73年を迎えて当地で活動が続ける劇団らくりん座が演じる。タイム

スリップした少年が“土地に生きる”ことの大切さを知る物語。

[日程] 2月14日

[会場] 大正堂くろいそみるひいホール(黒磯文化会館)

●さいたま市

彩の国さいたま芸術劇場

〒338-8506 さいたま市中央区上峰3-15-1

Tel. 048-858-5506 荻原文子

<https://www.saf.or.jp/arthalh/>

カンパニー・グランデ

『春の祭典』

芸術監督・近藤良平率いる新しいシアターグループとして2024年春に発足し、17～84歳の100名超のメンバーが活動するカンパニー・グランデによる公演第1弾。昨年3月の『花にまつわる考察』で試みた表現を踏まえながら、ストラヴィンスキーの『春の祭典』を使用し、学びあいと実験を重ねて創作した舞台作品を上演する。館内ではクリエーションメンバーの森洋久が、東京大学総合研究博物館の収蔵品とサウンドスケープをキュレーションした企画展示を同時開催。

[日程] 2月7日、8日

(企画展示:1月27日～2月15日)

[会場] 彩の国さいたま芸術劇場



ワーク・イン・プログレス公演『花にまつわる考察』(2025年3月) ©宮川舞子

●東京都台東区

東京文化会館

〒110-8716 台東区上野公園5-45

Tel. 03-3828-2111 阪本涼音

<https://www.t-bunka.jp/>

5館連携 若手アーティスト支援アフタヌーン・コンサート

5つの文化施設や芸術団体(東京文化会館、静岡音楽館AOI、トリトン・アーツ・ネットワーク/第一生命ホール、サントリーホール、東京芸術劇場)で育ったアーティストが東京文化会館に集うコンサート。都内を中心とした文化施設や芸術団体とネットワークを結び、若手アーティストの活動支援や、音楽活動による地域の活性化に取り組む「東京ネットワーク計画」の一環として実施。

[日程] 2月14日

[会場] 東京文化会館

●東京都世田谷区

せたがや文化財団

〒154-0004 世田谷区太子堂4-1-1 キャロットタワー5F

Tel. 03-5432-1535 佐藤根真愛

<https://www.setagayamusic-pd.com>

Setagaya Voice Fes

声のチカラ、音楽のチカラ

音楽プロデューサー・ベーシストの亀田誠治が手がける「みんなで楽しむ、みんなでつくる」会場一体型コンサート。INSPi(アカペラグループ)、ハラミちゃん(ポップスピアニスト)、河村“カースケ”智康(ドラマー)が出演。INSPiの杉田篤史によるワークショップを事前に受けた一般参加者も当日舞台に立ち、練習の成果を披露しながらプロとの共演を体験できる。

[日程] 2月15日

[会場] セタがやイーグレットホール

●横浜市

横浜みなとみらいホール

〒220-0012 横浜市西区みなとみらい2-3-6

Tel. 045-682-2020 中村康裕

<https://yokohama-minatomiraihall.jp/>

ミュージック・イン・ザ・ダーク® ～闇に響く音～

視覚に障がいのある演奏家と障がいのない演奏家によるアンサンブルが照明を落とした空間で

演奏し、ステージと客席が視覚以外の感覚を通じ音楽を享受するコンサート。視覚に障がいのある観客への多様な鑑賞サポートも用意。東京藝術大学学生による視覚に障がいのある人に向けた事前ワークショップも開催。出演は藤原道山(尺八)、澤村祐司(箏)、神田佳子(パーカッション)ほか。

[日程] 2月7日

[会場] 横浜みなとみらいホール

●神奈川県茅ヶ崎市

茅ヶ崎市美術館

〒253-0053 茅ヶ崎市東海岸北1-4-45

Tel. 0467-88-1177 小澤由季

<https://www.chigasaki-museum.jp/>

菅野陽と浜田知明 銅版画の夜明け前

1950年代に入ってから、日本で銅版画に取り組む芸術家が急速に増加したが、材料や道具、学ぶ場が限られていた。その中でさまざまな技法を取得し独自の表現へと昇華させた、菅野陽(1919～95)と浜田知明(1917～2018)の軌跡を紹介。菅野は最晩年に茅ヶ崎に住み、亡くなる直前まで制作活動を続けたと言われる。浜田は自分や社会への問いかけをユーモラスに表現し世界的に評価されている。

[日程] 2025年12月13日～2月23日

[会場] 茅ヶ崎市美術館

北陸・中部

●富山県射水市

アイザック小杉文化ホール ラポール

〒939-0351 射水市戸破1500

Tel. 0766-56-1515 三船江利子

<http://www.imizubunka.or.jp/rapport/index.html>

よみがえる思い出のうた ～心に響く音楽影絵物語～ モチモチの木

富山出身の音楽家・酒井雄一(バリトン)の発案による、富山

▼— 今月の情報

アーツセンター、アーツクルーから寄せられた情報を毎月掲載します

県出身や富山県を拠点とする音楽家・アーティストが共につくり上げる特別公演。第1部はピアノと独唱による昔懐かしい童謡・唱歌を中心としたステージとトーク、第2部は合唱・朗読と「オリジナルの動く影絵」で綴る音楽朗読劇『モチモチの木』を上演。合唱には富山少年少女合唱団が出演する。

[日程] 2月28日

[会場] アイザック小杉文化ホール
ラポール

●石川県金沢市

金沢市立中村記念美術館
〒920-0964 金沢市本多町3-2-29
Tel. 076-221-0751 齋藤直子
<https://www.kanazawa-museum.jp/nakamura/>

時代をかける馬

馬は古来より、人々の暮らしに寄り添ってきた。騎乗によって遠方への旅が可能となり、農耕や運搬の場面では馬の力が生活の豊かさをもたらした。戦の世においては武者を乗せて戦場を駆け、名馬にまつわる逸話が数多く語り継がれている。午年を迎えるにあたり、馬をモチーフとした絵画・陶磁器・漆工・金工などの美術工芸作品を紹介する。新春にふさわしい宝物や吉祥文様をあしらった作品など金沢の工芸を紹介する「宝尽くしの工芸」を同時開催。

[日程] 2025年12月6日～2月15日

[会場] 金沢市立中村記念美術館

●福井県福井市

福井県文化振興事業団
〒918-8152 福井市今市町40-1-1
Tel. 0776-38-8282 古川真由実
<https://www.hhf.jp/>

HARMONY HALL FUKUI presents ミュージカル『雪の女王』

2022年に初演したオリジナル

ミュージカル『雪の女王』を、新たなキャストと共に新演出版で上演。鶴見辰吾や丘山晴己ら豪華俳優陣に加え、県民を中心としたアンサンブルキャスト約60人が出演する。音楽は越のルビーアーティストらによる生演奏。ホール自慢のパイプオルガンや県産楽器のマリンバも物語に華を添え、ハーモニーホールふくいではしか観ることのできない舞台となっている。

[日程] 2月20日～23日

[会場] ハーモニーホールふくい

●福井県坂井市

坂井市文化振興事業団
〒919-0474 坂井市春江町西太郎丸15-22
Tel. 0776-51-8800 阿久根隆史
<https://sakai-bunka.jp/heartopia/>

ただいま福井プロジェクトコンサートvol.3「今年もおもっしえメンバーでコンサートやるでえー!」

福井出身の音大生らが、音楽を志す同年代との繋がりや演奏会運営のスキルの習得を目指して立ち上げたプロジェクト。今回は、立ち上げメンバーのひとつ下の世代を中心に新メンバーを迎え、パッサリやラフマニノフ、組曲『くるみ割り人形』など、幅広い演奏をお届けする。子どもの公演鑑賞体験支援事業として小学1年生～18歳以下を対象に、チケットを無料で進呈する取り組みも行う。

[日程] 3月14日

[会場] ハートピア春江

●山梨県甲府市

山梨県立美術館
〒400-0065 甲府市貢川1-4-27
Tel. 055-228-3322 井澤英理子
<https://www.art-museum.pref.yamanashi.jp/>

「日本画」の挑戦者たち それぞれの葛藤と探求

横山大観、速水御舟、川端龍子、

東山魁夷、横山操、中村正義など、明治から昭和にかけて独自の新しい日本画の表現を模索した画家27人に焦点を当てた特別展。西欧美術への傾倒や古典の新解釈、画壇への反発、画風の固定化からの脱却など、それぞれの日本画家たちの生き方と作品世界を通して、日本画の多様な魅力を堪能できる。

[日程] 2025年12月6日～2月1日

[会場] 山梨県立美術館

●長野県上田市

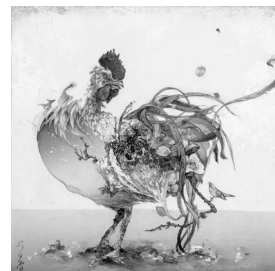
上田市立美術館
〒386-0025 上田市天神3-15-15
Tel. 0268-27-2300 清水雄
<https://www.santomiyuze.com/museum/>

クレパス誕生100周年 クレパス画名作展

1925年の誕生から2025年で100年を迎えた、日本で発明された唯一の洋画の描画材料であるクレパス®。その開発や普及に大きく貢献した上田市ゆかりの芸術家・山本鼎をはじめとする大正・昭和期の巨匠による作品から現代の作家が描いた新作まで、約150点を一堂に展示する。特別展示として上田地域の昭和初期と現在の児童によるクレパス画®の展示も見どころ。

[日程] 1月24日～3月22日

[会場] 上田市立美術館



入江明日香《Premices Printaniers 春の兆し》(2015年/サクラアートミュージアム蔵)

●岐阜県高山市

飛騨・世界生活文化センター
〒506-0032 高山市千島町900-1

Tel. 0577-37-6111 森清美
<https://hida-center.jp/index.html>

第16回飛騨センターオリジナル ミュージカル 『童話の森の探偵団』

飛騨地域の住民が出演する本格的なミュージカル。今回は小学2年生から社会人までの34人が出演し、オリジナルの脚本と楽曲に加え、地元吹奏楽団の生演奏や充実した音響・照明・映像・衣装で物語を描く。2009年の初演以来17年の歴史を重ね、低学年で参加したメンバーが社会人となり指導者として活躍するなど、地域住民が主体の創作文化活動として根づいている。

[日程] 2月23日

[会場] 飛騨・世界生活文化センター

●岐阜県可児市

可児市文化芸術振興財団
〒509-0203 可児市下恵土3433-139
Tel. 0574-60-3311 渋谷江厘
<https://kpac.or.jp/>

市民ミュージカル『君といた夏』

平成20年度から毎年続く市民参加型プロジェクト。今年度は公募で集まった子どもから大人まで約100人の市民キャストとサポーターが参加してつくり上げる可児オリジナルミュージカルを上演する。昭和49(1974)年の可児市を舞台に、小学生最後の夏休みを描いた映画『スタンド・バイ・ミー』をモチーフにした作品で、2012年の初演から再演を重ね、今回で5回目の上演。

[日程] 2月28日、3月1日

[会場] 可児市文化創造センター ala



『君といた夏』2022年公演

●静岡市

静岡音楽館AOI

〒420-0851 静岡市葵区黒金町1-9

Tel. 054-251-2200 小林旬

<https://www.aoi.shizuoka-city.or.jp>

子どものためのコンサート

「野平一郎 ピアノ・リサイタル
～記憶と現在～ 音の旅」

静岡音楽館AOIの2代目芸術監督を20年間務めた野平一郎の就任期間最後のコンサート。未来を担う子どもたちに向け、シューマンやドビュッシーの名曲から、初代芸術監督の間宮芳生による作品、そして野平自身が15歳の頃に作曲した作品や世界初演の新作『未来の子供達へ』まで、時代と世代を超えたピアノの名曲の数々を贈る。

[日程] 3月7日

[会場] 静岡音楽館AOI

●愛知県岡崎市

岡崎市シビックセンター

〒444-0813 岡崎市羽根町字貴登野15

Tel. 0564-72-5111 小川ひとみ

<https://www.civic.okazaki.aichi.jp/>

ジュニア・アートプロデューサー企画「音楽の手紙(メッセージ)～心花咲く未来へのコンサート～」

「ジュニア・アートプロデューサー」とは、小学5年生から中学2年生がコンサートを企画・制作する事業。今回は6人の子どもたちが参加し、半年の期間をかけてコンサートのタイトルやプログラムの検討、広報活動などの業務に挑戦し、企画したコンサートを



企画・制作の様子

お届けする。演奏家やスタッフと共に考え、行動することで、子どもたちの興味、関心の幅の広がりを目指す。

[日程] 3月29日

[会場] 岡崎市シビックセンター

●愛知県春日井市

かすがい市民文化財団

〒486-0844 春日井市鳥居松町5-44

Tel. 0568-85-6868 小松淳子

<https://www.kasugai-bunka.jp/>

かすがい得1000ライブvol.4
和楽器青年隊－バレンタインズ
スペシャルライブ

気軽に多彩な音楽の“生”にふれてもらうことを目的に、かすがい市民文化財団スタッフが“特選”したアーティストを紹介するシリーズ企画。今回は、同財団プロデュースによる新ユニットの旗揚げ公演として、春日井市出身の吉越瑛山、吉越大誠ら6人の和楽器奏者に鍵盤奏者を加え、全員が愛知県出身者で結成。古典からオリジナルまで幅広いプログラムを披露する。

[日程] 2月14日

[会場] 春日井市民会館

近畿

●三重県四日市市

三重県文化会館

〒514-0061 津市一身田上津部田1234

Tel. 059-233-1100 堤佳奈

<https://www.center-mie.or.jp/bunka/>

OiBokkeShi×四日市市文化会館×三重県文化会館
老いのプレーパーク出張演劇
公演 in 四日市

OiBokkeShi主宰の菅原直樹と三重県のシニアや介護関係者で結成された劇団「老いのプレーパーク」。今回は四日市メンバーも加わり、ダンサーの三輪亜希子が振付を行う。上演作品は、老人ホーム青春群像劇『老

人ハイスクール』と在宅アクションアドベンチャー『いざゆかん』。演劇を用いて超高齢社会を豊かに生きるヒントを届ける。字幕やヒアリングループなどの鑑賞サポート有り。

[日程] 3月14日、15日

[会場] 四日市地域総合会館 あさけプラザ

●滋賀県大津市

滋賀県立美術館

〒520-2122 大津市瀬田南大萱町1740-1

Tel. 077-543-2111 荒井保洋

<https://www.shigamuseum.jp/>

笹岡由梨子のパラダイス・ダンジョン

エネルギーで魅力的な唯一無二の世界観をもつ現代美術家・笹岡由梨子の、美術館では初となる個展を開催。最初期の作品から近年発表された近作、そしてこの展覧会のために制作された新作の映像作品の展示を通して、笹岡の作品における映像とキャラクターの関係性とその変遷に迫る。関連イベントでは小中学生と保護者対象のワークショップやトークイベントなども行われる。

[日程] 1月17日～3月22日

[会場] 滋賀県立美術館

●大阪府豊中市

豊中市立文化芸術センター

〒561-0802 豊中市曽根東町3-7-2

Tel. 06-6864-3901 本城聖美

<https://www.toyonaka-hall.jp/>

Play is Pray

演劇と弦楽カルテット、クラシカルDJを融合させた舞台作品を、2024年に初演した展示室から中ホールに移して再演する。「センチュリー豊中名曲シリーズ」のロビー企画から派生し、藤井颯太郎を脚本・演出に迎え、作曲家・クラシカルDJの水野蒼生が

作曲・編曲し、振付を手がける本城祐哉が音楽も書き下ろすなど、多様な役割と表現を行き来しながら創作した新感覚のオリジナル作品。

[日程] 2月20日、21日

[会場] 豊中市立文化芸術センター



「Play is Pray」初演より(2024年2月)

●神戸市

神戸文化ホール

〒650-0017 神戸市中央区楠町4-2-2

Tel. 078-351-3535 野澤美希

<https://www.kobe-bunka.jp/hall>

神戸文化ホール開館50周年記念事業「ともしびラジオ～50人の市民が語る、神戸文化ホールのこと～」

開館50周年を記念し、来館者やアーティストなど、さまざまなかたちで神戸文化ホール関わった50人にホール運営スタッフがインタビューを行い、ラジオ番組として配信する。番組はSpotifyやApple Podcast、ホール公式YouTubeチャンネルのほか、ホール1Fロビー内で聴取可能。文化活動の灯を灯し続けてきた人々の語りから、文化施設に積み上げられてきた時間をたどる。
[日程] 3月末まで(公開は次年度以降も継続)
[URL] <https://www.kobe-bunka.jp/hall/50th/news/1314/>

●兵庫県養父市

やぶ市民交流広場(YBファブ)

〒667-0021 養父市八鹿町八鹿538-1

Tel. 079-662-0071 林愛

▼— 今月の情報

アーツセンター、アーツクルーから寄せられた情報を毎月掲載します

<https://www.city.yabu.hyogo.jp/bunka/index.html>

養父市芸術監督 青柳いづみこ プレゼンツ「青柳いづみこ&西 本夏生～めくるめくラテンク ラシック～」

養父市芸術監督である青柳いづみこと西本夏生が贈る2台ピアノコンサート。フランス音楽とスペイン音楽に精通している2人ならではのプログラムを届ける。演奏曲はモーツァルト＝グリーグ『ピアノ・ソナタK545』、ドビュッシー『イペリア』、カプースチン『マンテカ』ほか。同日には入場無料で0歳から鑑賞できる「ピアノと朗読で楽しむファミリーコンサート」も開催予定。

[日程]3月1日

[会場]やぶ市民交流広場ホール

●奈良県奈良市

奈良県立美術館

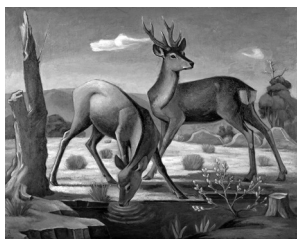
〒630-8213 奈良市登大路町10-6

Tel. 0742-23-3968 松川綾子

<https://www.pref.nara.jp/11842.htm>

奈良のモダン ～美術をめぐる人々

美術家をはじめ、研究者や文学者から美術行政家まで、奈良に足跡を残した人々を紹介する展覧会。美術を通じて展開された、文化人たちの活動を概観することで、奈良と美術との関わりを検証すると同時に、独自の文化が華開いた近代奈良の一面に目を向けることのできる展示となっている。期間中はギャラリートークや美術講座、ナイトミュージアムも開催。



浜田保光「水辺の鹿」(1932年/奈良県立美術館蔵)

ジウムも開催。

[日程]1月17日～3月15日

[会場]奈良県立美術館

中国・四国

●鳥取県倉吉市

鳥取県立美術館

〒682-0816 倉吉市駄経寺町2-3-12

Tel. 0858-24-5442 山本・三浦

<https://tottori-moa.jp/>

CONNEXIONS | コネクションズ 接続するアーティストたち

鳥取県立美術館は2025年3月に「未来をつくる美術館」として開館し、新しい価値を育み文化をともに育てる場として、同時代の表現を紹介することにも力を注いでいる。本展では、作品を通じて文化や社会の断絶を超え、異なる領域を架橋する国内外のアーティスト7組を招き、本展のために制作された新作の展示やワークショップ、来場者参加型のプロジェクトを開催する。

[日程]2月7日～3月22日

[会場]鳥取県立美術館

●鳥根県益田市

鳥根県立石見美術館

〒698-0022 益田市有明町5-15
グラントワ内

Tel. 0856-31-1860 大谷姫歌

<http://www.grandtoit.jp/museum/>

開館20周年記念企画展「美術 館がうまれて、それから—コレク ションと石見美術館の20年—」

開館20周年を記念して、「石見美術館」をテーマとした展覧会を開催。橋本明治らの日本画や草間彌生の現代アート、シャネルのドレスなど約80点に上る個性的なコレクションや、グラントワの大型模型などを通して、20年間の歩みを振り返る。2月14日には、同館広報物デザインを多く手がけてきたグラフィックデザイナーの野村勝久によるワー

クショップも実施。

[日程]2025年12月20日～2月

23日

[会場]島根県立石見美術館

●岡山県笠岡市

笠岡市立竹喬美術館

〒714-0087 笠岡市六番町1-17

Tel. 0865-63-3967 柴田就平

<https://www.city.kasaoka.okayama.jp/site/museum/>

特別展「知られざる竹喬 —新 出作品と新資料から—」

小野竹喬生誕130年の記念展覧会以降6年が経過し、新たな竹喬作品や関連資料が発見され公開の時期を迎えている。本展は、84年ぶりの公開となる『晴日』をはじめ、新たに見つかったスケッチ類や自筆原稿などの貴重な資料を通じて竹喬の人となりにつれ、新たな側面に焦点を当てつつ竹喬芸術の理解を深めることのできる展覧会となっている。

[日程]2025年12月13日～2月8日

[会場]笠岡市立竹喬美術館

●広島県東広島市

東広島芸術文化ホールくらら

〒739-0015 東広島市西条栄町7-19

Tel. 082-426-5900 西村裕子

<https://kurara-hall.jp/>

くららダンス事業 市民参加型ダンス公演 「みんな de ダンス!!」Vol.2

2021年度よりダンスの“種蒔き”を始め、24年度から市民参加型のダンス公演に挑戦。2回目の開催となる今年度は、「平和」をテーマに、日常に潜む小さな平和を集め、ダンスアーティストのマニシアと公募による2歳から80歳代までの市民ダンサー27人が5回のクリエーションでつくり上げたオリジナルのダンス作品を披露する。

[日程]2月14日

[会場]東広島芸術文化ホールくらら



「みんな de ダンス!!」Vol.1の参加者たち

●愛媛県松山市

愛媛県美術館

〒790-0007 松山市堀之内

Tel. 089-932-0010 石崎三佳子

<https://www.ehime-art.jp/>

コレクション展V

「みる冒険 オノマトペで楽しむ」

「みる冒険」シリーズは、2021年の『えひめ視覚障がい者とつくる「みることを考える」プロジェクト』から始まったコレクション展。6回目の今回は、作品の解説にオノマトペが使用されていたり、来場者が作品から感じたオノマトペを表現できるスペースを用意したりすることで、共感やズレを共有しながら作品を味わうことができる展示が展開される。

[日程]1月27日～4月19日

[会場]愛媛県美術館

●高知県高知市

新来島高知重工ホール

〒780-0870 高知市本町4-3-30

Tel. 088-824-5321 佐竹翔吾

<https://kkb-hall.jp/>

高知地域連携インクルーシブ アートプロジェクト 人形劇『河の童』

障がいのある人に芸術・文化にふれる機会を広げることを目的とした「高知地域連携インクルーシブアートプロジェクト」。今回はろう者と聴者による人形劇団「デフ・パペットシアター・ひとみ」を迎え、異なる世界に生きる人間と河童の物語をノンバーバル進行で上演する。公演前の鑑賞ルー

ルとマナー解説でスクリーンへ文字表示と手話通訳を行い、“文化とふれ合う空間”を提供する。
[日程] 2月7日
[会場] 新来島高知重工ホール
(高知県立県民文化ホール)

九州・沖縄

●北九州市

北九州市立美術館
〒804-0024 北九州市戸畑区
西鞆ヶ谷町21-1
Tel. 093-882-7777 落合・三浦
<https://kmma.jp/>

鉄と美術 鉄都が紡いだ美の軌跡

1901年に官営八幡製鐵所が操業を開始して以来、製鉄業を中心に産業が集積し、一大重工業地帯「北九州工業地帯」として発展を続け、“鉄の都”の名を馳せてきた北九州市。その歴史と記憶を、そこで生み出された美術作品や美術活動でたどること、日本の近代を担ったひとつの都市が育んだ文化の実態とその意義を改めて考える。

[日程] 1月4日～3月15日
[会場] 北九州市立美術館

●福岡市

福岡県立美術館
〒810-0001 福岡市中央区天神5-2-1
Tel. 092-715-3551 岡部るい
<https://fukuoka-kenbi.jp/>

みんなの画材―山本文房堂の 的野さんは、野見山暁治さんと ともにこの街を励まし続けた

額縁画材店主・的野恭一(1930～2022)の美術への取り組みをたどる展覧会。的野は東京藝術大学の版画グループ「アトリエC-126」の作品紹介で福岡に東京の版画文化を浸透させ、画家の野見山暁治と共に誰もが展示と講評の機会を得る「サムホール公募展」を開催するなど、福岡の美術を支えた。版画コレクションや野見山の作品を通して、

的野の人柄や交流にふれる。
[日程] 1月20日～3月8日
[会場] 福岡県立美術館

●長崎県長崎市

長崎歴史文化博物館
〒850-0007 長崎市立山1-1-1
Tel. 095-818-8366 大石美織
<https://www.nmhc.jp/>

開館20周年特別企画展 「長崎遊学」

江戸時代の長崎を一つの“大学”と見立て、遊学者と呼ばれた人々が送った“キャンパスライフ”＝長崎で見た異国の風景、彼らが過ごした非日常的な日常生活、出会った人々、学んだ学問・芸術を多数の絵画や資料から紹介する。講演会や芸妓衆による長崎検番の舞、ワークショップなども企画され、来館者は“オープンキャンパス”のように参加できる。

[日程] 1月17日～3月4日
[会場] 長崎歴史文化博物館

●長崎県佐世保市

アルカスSASEBO
〒857-0863 佐世保市三浦町2-3
Tel. 0956-42-1111 古賀・塚原・山口
<https://www.arkas.or.jp/>

～ソナタを聴く 第2楽章～ ランチタイムコンサートVol.38 「岡田奏 フランスのエスプリ 薫るピアノズム」

「複数楽章を聴くことができる聴衆を育てたい」という思いで企画されたコンサート。今回は「ソナタを聴く」をテーマに、第1楽章にピアニストの中川賢一(12月16日)、第2楽章にピアニストの岡田奏(2月5日)、第3楽章にヴァイオリニストの石上真由子(3月8日)を迎える。第2楽章は「ランチタイムコンサート」の一環として実施。近隣の飲食店と連携しており、公演チケットを提示すると公演日限定で特典も。

[日程] 2月5日
[会場] アルカスSASEBO

●大分県竹田市

竹田市文化振興財団
〒878-0024 竹田市玉来1-1
Tel. 0974-63-4837 伊達奈都紀
<https://www.city.taketa.oita.jp/glanz/>

市民創作劇プロジェクト2025 『マジカル・タケタリー・ツアー』

開館以来、市民と共に多彩な舞台作品をつくってきたグランツたけた。今回は、竹田に暮らす人々から寄せられた人生の一場面を基に、短編のオリジナル朗読劇を創作。7月～8月に劇作家の泊篤志が11人の市民へインタビューを行い、さまざまな音楽と人間が交錯する物語が完成。公募で集まった市民が稽古を重ね、竹田発の新たな物語を演じる。

[日程] 2月23日
[会場] 竹田市総合文化ホール
グランツたけた



市民インタビューの様子

●宮崎県宮崎市

みやざきアートセンター
〒880-0001 宮崎市橋通西3-3-27
Tel. 0985-22-3115 奥野恵理
<https://miyazaki-ac.com/>

Art Box-アートボックス #08-

アートを通じた出会いと交流、そして制作活動の支援を目的とした個展形式の展覧会。本年度は、宮崎県在住・出身のアーティスト5名による個展を開催する。会期中はアーティストトークやワークショップも実施。作家同士や来場者の交流を深めなが

ら、多彩な技法と表現によって生み出されるアート作品に、ジャンルを問わず幅広くふれられる機会を提供する。

[日程] 1月31日～2月15日
[会場] みやざきアートセンター

●鹿児島県湧水町

鹿児島県霧島アートの森
〒899-6201 始良郡湧水町木場6340-220
Tel. 0995-74-5945 田中信幸
<https://open-air-museum.org/>

2025年度 冬コレクション展

鹿児島県霧島アートの森では、屋内に収蔵する40名の作家の作品を、年数回に分けてコレクション展として紹介している。今回は、長沢英俊《李白の家》、オノ・ヨーコ《絶滅に向かった種族(2319-2322)》など19点を展示・公開。また、多目的スペースでは、野外作品設置当時の様子や作家の制作意図を収録した映像も上映される。

[日程] 2025年11月29日～2月23日
[会場] 鹿児島県霧島アートの森

●沖縄県浦添市

浦添市美術館
〒901-2103 浦添市仲間1-9-2
Tel. 098-879-3219 金城聡子
<https://urasoe-artmuseum.jp/>

浦添市美術館開館35周年特別展 「超リアル!琉球王国の華・漆芸 貝摺奉行所展」

琉球王国で外交の贈り物として重用された漆器。これら献上品の製作から、王宮や寺院の建物装飾に至るまでを担ったのが、王府の貝摺奉行所である。首里城敷地では多くの貝が出土し、螺鈿細工に用いた様子がうかがえる。本展では、美しい漆芸品の数々や古文書などの文献資料を通して、貝摺奉行所の実相に迫る。

[日程] 1月23日～3月8日
[会場] 浦添市美術館

▼— 今月の情報 (アーツセンター編)

新たにオープンした公立のアーツセンターを紹介します

アーツセンター情報

●データの見方

情報は所在地の北から順に掲載しています。●で表示してあるのはアーツセンターの所在地です。以下名称、住所、電話番号、公式サイトURLを記載しています。また、基礎データとして、設置者、運営者、ホール席数など施設概要を紹介しています。

●情報提供のお願い

地域創造では、地域の芸術環境づくりを積極的に推進するアーツセンター(ホール、美術館などの施設のほか、ソフトの運営主体も含みます)の情報を収集しています。特に、新規の計画やオープンなどのトピックスについては、この情報欄に掲載していく予定です。このページに掲載を希望する情報がございましたら、下記担当までご連絡ください。

●情報提供先

芸術環境部 伊藤
Fax. 03-5573-4060
Tel. 03-5573-4093
letter@jafra.or.jp

●長野県安曇野市

安曇野市穂高鐘の鳴る丘集会所

〒399-8301 安曇野市穂高有明
7327-81

Tel. 0263-55-3131

<https://www.city.azumino.nagano.jp/soshiki/43/126979.html>

◎2025年6月8日オープン



1947(昭和22)年放送のNHKラジオドラマ『鐘の鳴る丘』の舞台のひとつにもなり、近年では郷土の歴史・文化学習や青少年の研修施設として利用されていた歴史的建造物(安曇野市指定有形文化財)を、芸術文化活動の場という新たな機能を加えて再オープン。

耐震補強や内装のリニューアルに加え、アトリエや宿泊するアーティストの寝室、談話室、シェアキッチンなどを新たに設けた。東京藝術大学との連携事業である「安曇野アーティスト・イン・レジデンス」の拠点であるほか、市のアート事業に関わるアーティストの宿泊、創作活動の場としても利用されている。

アーティストだけでなく、広く一般利用者にも創作や発表の場を提供することで(宿泊利用は市の事業に限定)、アーティストと市民が交流を通じて地域の魅力を再認識し、さらに新たな文化を創造・発信するアート拠点となることを目指す。

[施設概要]アトリエ3室、屋外作業場、寝室・シェアキッチン ほか
[設置・管理・運営者]安曇野市
[設計者](株)フジ設計

●愛知県東海市

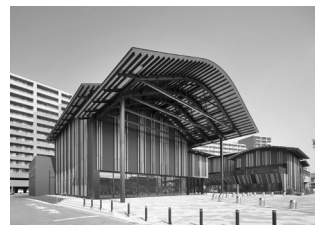
東海市創造の杜交流館

〒477-0036 東海市横須賀町
狐塚11

Tel. 0562-32-5700

<https://tokai-souzou.jp>

◎2025年5月1日オープン



横須賀(東海市の横須賀町地域)文化の発信や多世代交流などをコンセプトに、映像を通じた創造活動の発展・地域活性化を目的として新設。

隈研吾設計による建物を象徴する曲線屋根は、尾張横須賀まつりの象徴である山車から着想を得ている。外装には温かみのある木材を多く使用し、街並みとの調和を大切にデザインされた。常時映画を上映している映像ホールのほか、本格的な機材が揃った収録・撮影スタジオや、基本的な編集からカラーグレーディングまで可能な映像編集室、映像音響調整室などを備え、誰でも創造活動に参加できる。地域の歴史文化を学習・体感でき、また映像の活用による生涯学習活動や創造活動、人々の交流を促進する拠点として期待されている。

[オープニング事業]ミラーライアーフィルムズ東海市 プレミア上映会
[施設概要]映像ホール1(100席)、映像ホール2(50席)、多目的ギャラリー、収録・撮影スタジオ、映像編集室、映像音響調整室 ほか

[設置者]東海市

[管理・運営者]知多メディアネットワーク(株)

[設計者]隈研吾建築都市設計事務所

●鳥取県倉吉市

鳥取県立美術館

〒682-0816 倉吉市駄経寺町
2-3-12

Tel. 0858-24-5442

<https://tottori-moa.jp/>

◎2025年3月30日オープン



県立クラス美術館としてはほぼ日本最後発となる新設の美術館。公立としては初めてPFI方式により建設・運営が行われた。壁面にガラスを多用した建物は、陽光をふんだんに取り入れた明るく広々としたづくりが特徴。3階までの吹き抜けスペース「ひろま」は、憩いの場として地域に開放され、パフォーマンスや展示、ユニークベニユーにも活用。各展示室に加え、多様な活動の舞台となる県民ギャラリーとともに、人々の交流の場として、文化や芸術を生かした地域づくりの拠点となっている。

また、子どもから大人までさまざまな世代にアートを通じた学びの場を提供する「アート・ラーニング・ラボ」など、鳥取県独自の取り組みやさまざまなプログラムにより、誰もがアートを身近に感じることができる拠点を目指す。

[オープニング事業]開館記念展「アート・オブ・ザ・リアル 時代を超える美術」

[施設概要]コレクションギャラリー、企画展示室、展望テラス、ひろま、ホール、県民ギャラリー(約500㎡)、スタジオ3室 ほか

[設置者]鳥取県

[管理・運営者]鳥取県立美術館パートナーズ(株)

[設計者]横総合計画事務所・竹中工務店共同企業体

約半数の美術館で収蔵品のデジタル・アーカイブ化が進む

2024年度 「地域の公立文化施設実 態調査」③

美術館ほか

*2024年度「地域の公立文化施設実態調査」報告書は、地域創造ホームページにも掲載しています。

●2024年度「地域の公立文化施設実態調査」調査概要

◎調査対象

公立文化施設のうち、「専用ホール」、「その他ホール」、「美術館」、「練習場・創作工房（アーティスト・イン・レジデンス施設を含む）」およびそれらを含む「複合施設」と、施設の設置主体にあたる地方公共団体。

◎調査時期

2024年9月～11月

◎調査方法

全国の地方公共団体の文化行政担当者に、当該団体が設置主体となっている調査対象施設を記入する「施設設置一覧記入票」と「地方公共団体向け調査票」、「施設調査票」を配布。当該団体において「施設設置一覧記入票」と「地方公共団体向け調査票」の記入および「施設調査票」の各施設への配布と取りまとめをいただいた。

◎調査回収数

●地方公共団体票の有効回収数
1,756（都道府県47（100%）、政令市20（100%）、市区町村1,687（98.0%）、一部事務組合2）

●地方公共団体からの回答
3,500館 延べ3,692施設
（「専用ホール」1,535、「その他ホール」1,340、「美術館」651、「練習場・創作工房」166）

●地方公共団体から回答があった3,500館のうち、施設からの施設調査票の有効回収数

3,478館 延べ3,670施設
（「専用ホール」1,523、「その他ホール」1,333、「美術館」648、「練習場・創作工房」166）

●調査研究に関する問い合わせ

芸術環境部 中嶋・児島
Tel. 03-5573-4066

今回は「美術館」および地方公共団体によるアート関連の主な調査結果を紹介する。なお、今回調査の対象となった「美術館」651施設（地方公共団体からの回答により把握した施設数。2019年度調査では648施設）のうち、施設側から有効回答があったのは648施設である。

●回答施設の概況

設置主体別では、都道府県88施設（13.6%）、政令市40施設（6.2%）、市区町村520施設（80.2%）となっている。管理運営形態別では、指定管理が266施設（41.0%）、直営が377施設（58.2%）、閉館中が5施設（0.8%）である。2019年度調査と比較すると、指定管理の比率が38.9%から41.0%へと増加している[表1]。種別で見ると、291施設（構成比44.9%）が博物館法上の「登録博物館・博物館相当施設」である。

●施設の運営状況（スタッフ数・専門職員の有無・収入）

2024年9月時点での美術館全体のスタッフの平均合計人数は9.1人で、内訳は、学芸員3.3人、学芸員以外の事業系スタッフ2.9人、施設管理系スタッフ2.2人、総務系スタッフ3.0人となっている。設置主体別では、都道府県（21.3人）、政令市（14.7人）が多く、市区町村（6.6人）との差が顕著だった[表2]。教育普及については、「専門セクションがある」が6.9%、「専門セクションはないが専門の担当者がある」が9.6%となっている。「専門セクションがある」比率は都道府県施設で29.5%、政令市で12.5%と高い。

2023年度決算金額による収入金額は、直営施設で平均79,634千円、指定管理施設で平均141,250千円となっており、双方とも2018年度決算金額（直営65,232千円、指定管理131,442千円）から増加している。

●自主事業の実施状況と美術館運営

展覧会や教育普及事業等の自主事業を実施している美術館は全体の95.0%であった。自主事業実施施設616施設のうち、67.9%が「常設展と企画展の両方」を実施、「企画展のみ」が

23.4%、「常設展のみ」が6.0%となっている[図1・2]。企画展のテーマとして多いのは「地域のアーティストが主に出演する企画展」（43.1%）と「子ども（親子）を対象とした普及型企画展」（34.2%）である。

展覧会以外の自主事業としては、「ギャラリートーク」（69.5%）、「館内でのワークショップ」（64.0%）、「学校向け団体鑑賞」（52.1%）、「講演会」（51.9%）、「学芸員による出前授業」（41.1%）、「他ジャンルのイベント」（33.8%）が多くの施設で実施されている[図3]。

館内における美術品の写真撮影については、「全面禁止」（15.1%）、「一部認めている」（72.1%）、「全面的に認めている」（12.2%）となっており、全体の8割以上が一定程度写真撮影を認めている（2019年度では「全面禁止」が32.3%）[表3]。多言語対応は「行っている」が34.6%、「検討中」が9.4%であった（2019年度は「行っている」が18.7%）[表4]。双方ともにこの5年間でかなり進んでいる。

また、令和4（2022）年度の博物館法改正で求められるようになった収蔵品のデジタル・アーカイブ化については、半数近くの施設でアーカイブ化が進んでいる（収蔵品の静止画・3Dデータ、展覧会の3Dデータ：計49.7%）[表5]。

●地方公共団体によるアートプロジェクト／アーティスト・イン・レジデンスの実施

地方公共団体が主催として参画し、アートによる地域活性化などを目的にまちなかや野外などの地域で展開する取り組みである「アートプロジェクト」については、地方公共団体の14.6%が実施、1.0%が計画中となっている。団体種別では、都道府県の51.1%、政令市の60.0%で何らかのアート・プロジェクトが実施されている[図4]。

アーティストが地域に滞在して作品制作を行う「アーティスト・イン・レジデンス」については、地方公共団体の5.0%が実施、1.3%が計画中である。こちらは都道府県の27.7%、政令市の45.0%で実施されており、政令市での実施比率が高い[図5]。

表1 設置主体別、管理運営形態別／施設内容内訳(%)

		設置主体別			管理運営形態別		
		都道府県	政令市	市区町村	指定管理	直営	閉館中
2024年度	施設数	88	40	520	266	377	5
	(%)	13.6	6.2	80.2	41.0	58.2	0.8
2019年度	施設数	83	42	503	244	381	
	(%)	13.2	6.7	80.1	38.9	60.7	

表2 スタッフ数の平均(人)(設置主体別)

	有効回答数	合計数	学芸員	うち、 有期雇用	学芸員以外の 事業系スタッフ	施設管理系 スタッフ	総務系 スタッフ	正規 職員
美術館全体	634	9.1	3.3	1.1	2.9	2.2	3.0	4.9
都道府県施設	88	21.3	7.5	1.8	5.9	3.9	6.3	13.1
政令市施設	40	14.7	5.0	1.1	4.1	2.7	3.9	9.3
市区町村施設	506	6.6	2.3	0.9	2.1	1.9	2.2	3.2

図1 2023年度 自主事業の実施状況と担い手(%) [N=648]

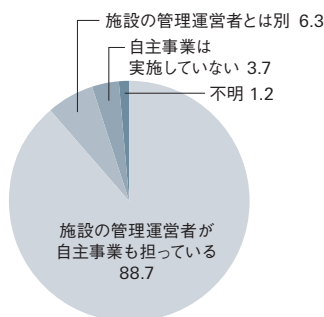


図2 2023年度 自主事業(展覧会)の実施状況(%) [N=616]

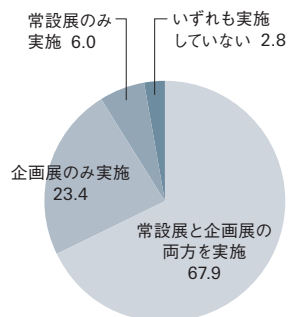


表3 美術品の写真撮影の認可状況(%) (設置主体別)

	有効回答数	全面的に禁止している	一部認めている	全面的に認めている	不明
美術館全体	616	15.1	72.1	12.2	0.6
都道府県施設	85	10.6	84.7	4.7	-
政令市施設	40	7.5	87.5	2.5	2.5
市区町村施設	491	16.5	68.6	14.3	0.6

表4 多言語での解説表示の実施状況(%) (設置主体別)

	有効回答数	行っている	現在検討中だが、まだ行っていない	行っていない	不明
美術館全体	616	34.6	9.4	53.9	2.1
都道府県施設	85	80.0	8.2	11.8	-
政令市施設	40	55.0	5.0	35.0	5.0
市区町村施設	491	25.1	10.0	62.7	2.2

表5 収蔵品のデジタル・アーカイブ化(%) (設置主体別)

	有効回答数	収蔵品の静止画画像をアーカイブ化	収蔵品の3Dデータをアーカイブ化	展覧会の3Dデータをアーカイブ化	まだ行っていない	不明
美術館全体	584	48.5	1.0	0.2	48.6	1.7
都道府県施設	80	80.0	5.0	-	15.0	-
政令市施設	36	77.8	-	-	22.2	-
市区町村施設	468	40.8	0.4	0.2	56.4	2.1

図3 2023年度の展覧会以外の自主事業の種類(MA)(%) [N=616]

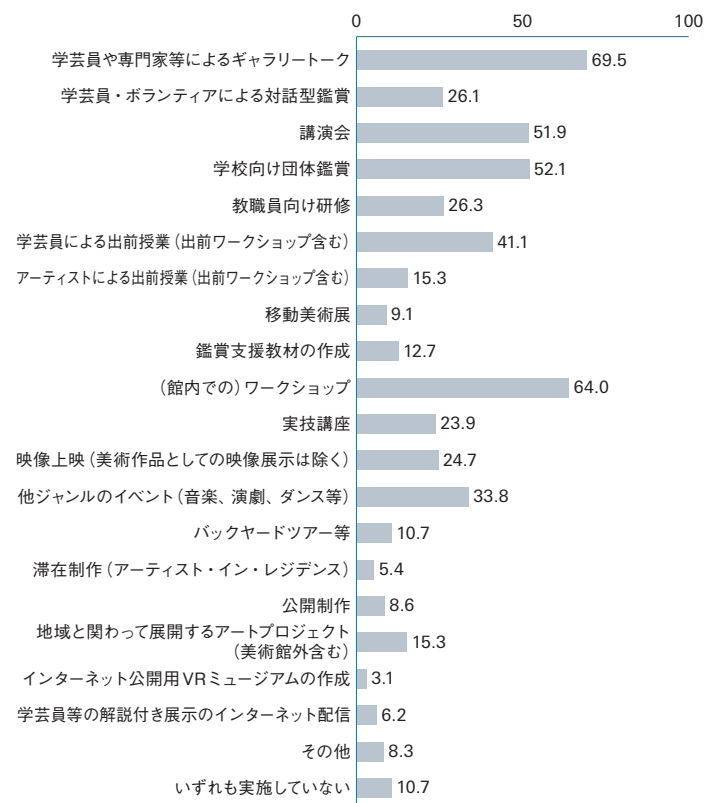


図4 アートプロジェクトの有無(%) (団体種別)

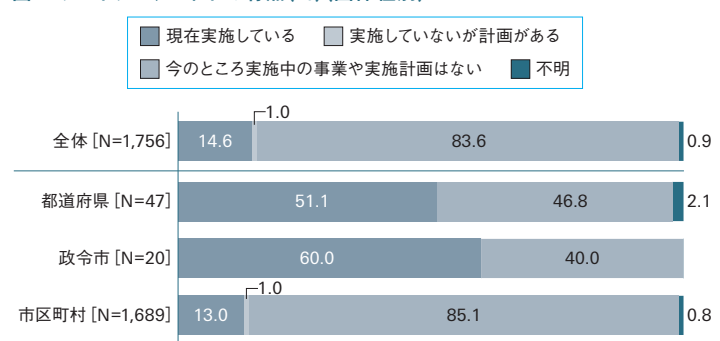
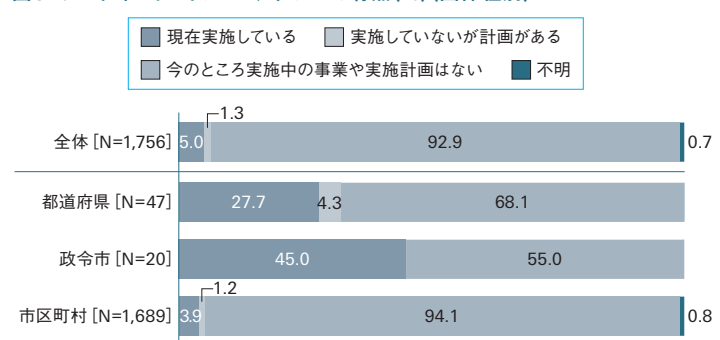


図5 アーティスト・イン・レジデンスの有無(%) (団体種別)



▼— 今月のレポート

財団の支援事業や地域の創造活動に参考になる催しを取り上げて
レポートします

沖縄県那覇市

那覇文化芸術劇場なはーと プレヒト×沖縄芝居 新作プロジェクト2023-2025 沖縄芝居 『花染小の美ら姉』



『花染小の美ら姉』(上: 三人の神/中: カミー小と松金/下: カーテンコール)
撮影: 大城洋平

●プレヒト×沖縄芝居新作プロジェクト
2023-2025 沖縄芝居『花染小の美ら姉』
(はなずみぐわーぬちゅらんみー)
[主催] 那覇市
[企画制作] 那覇文化芸術劇場なはーと、
シアター・クリエイト株式会社
[会期] 2025年12月14日
[会場] 那覇文化芸術劇場なはーと 大劇場
[原作] ベルトルト・プレヒト『ゼチュアン
の善人』(翻訳: 林立騎、構成: 新井章仁)
[作・演出] 嘉数道彦
[振付] 阿嘉修
[音楽] 仲村逸夫
[協力] 沖縄芝居研究会

●沖縄芝居

沖縄方言(うちなーぐち)による大衆演劇。廃藩置県以後、芸能の担い手であった士族が、組踊など琉球王朝の芸能を庶民向けに上演したのが始まりで、歴史物、恋愛ものなど観客のニーズを取り入れながら商業演劇として発展していった。

那覇文化芸術劇場なはーとは、2021年秋の開場以来、現代の観客に地域の伝統芸能を近づける新創作を行い、子どもたちにわかりやすく体感してもらう「組踊たいそう」や組踊の演目を現代演劇として新解釈した『花売の縁オン(ザ)ライン』を発表。その最新作として23年から3年かけてプレヒトの『ゼチュアンの善人』を沖縄芝居にする取り組みを行い、25年12月14日に完成版の『花染小の美ら姉』を披露した。

原作は、善人を探す神々に親切にした娼婦のシェン・テが褒美でタバコ屋を開くが、その善意につけ込んだ人々に追い詰められていく物語。今回の沖縄芝居は原作を踏まえた筋書きながら、タバコ屋は遊郭に置き換え、霊媒師のユタが人間界での出来事を神々に報告し、遊郭の主になった主人公が没落士族と身分違いの恋をするなど、沖縄ならではの設定となっていた。また、夜空の星々と人々の暮らしを重ねた台詞を盛り込むなど、これまでのプレヒト劇とは異なる情緒を舞台にもたらした。

企画を担当したなはーとの土屋わかこさんは、「沖縄芝居では、女性の登場人物の多くがひどい目に遭います。でも、お客さんはそれを観て、泣いて、パワーをもらって帰っていく。『なぜこんな悲劇に希望を感じられるのか』という驚きが、『ゼチュアンの善人』を沖縄芝居のフィルターを通してやってみたいというアイデアに繋がりました。苦境に陥るたびに、私はこの作品のことを思い起こしてきました。この物語では神が匙を投げ、どういう結末が善人に相応しいかは観客に委ねられます。こうした試練をどう乗り越えていくのかは現代の社会でも同じだと思います」と話す。

1年目には同劇場企画制作グループ統括を務める林立騎さんの新訳を基に、沖縄の劇団ビーチ・ロック主宰の新井章仁さんが構成・演出したリーディングを上演。沖縄芝居版の作・演出を担う琉球芸能実演家の嘉数道彦さんをはじめ参加するスタッフ、キャストは、この上演を参照して2年目の朗読劇版を創作、3年目の本公演に向けてブラッシュアップを続けた。

林さんは、「できるだけニュートラルな状態で原作に向き合えるよう翻訳しました。従来の翻訳では、身分の低い労働者は『わし』で、話し方も『～だべ』。しかしドイツ語ではそうした表現は存在しません。また、戯曲の中で使われている経済用語も話すには不自然だとして別の言い方になっている。ですから今回はむしろそのまま訳すことにこだわりました」と話す。

演出で最も印象的だったのがラストシーンだ。人を騙したのに幸せを手にした者、裏切った者などすべての登場人物と市井の人々(市民参加出演者)が舞台に揃い、それぞれに暮らしている様は、世の不条理を映していた。そして、全員が客席に背を向け、出演者と観客の視線が同じになったところで、幕は下りた。

嘉数さんは、「沖縄芝居は大衆演劇ですから、『楽しかった』『泣いた、よかった』と喜んでもらうのが基本。ただ、この作品をやるからには、最後に拍手しながら『あれ?』と考えてもらいたかった。沖縄芝居の中でそれが叶ったなら、プレヒトに対する新しい挑戦にもなるかなと思いました。舞台上の役者はもちろん、どんな人でも生きてそれぞれの道を歩いている、そんな幕切れを客席のみなさんと一緒に迎えたいと考えました」と最後の場面を振り返る。

沖縄芝居定番の楽曲やそのエッセンスで音楽を構成し、今回は珍しい和音を用いた曲づくりも行ったのは、嘉数さんの盟友である歌三線の仲村逸夫さん。「創作活動は苦しいけど、楽しい。ただ、自分は作曲家ではなくて実演家で、立ち返る場所はいつも古典だと思っています」。嘉数さんも同じで、足場は古典にあり、二人とも新作は自ら手がけるより「依頼されるもの」だと断言する。だが、だからこそ伝統芸能としての構造や考え方をすり減らすことなく、試行錯誤もできるのだろう。

幾つもの公演、稽古を掛け持ちする実演家たちとの創作ペースの調整、大劇場公演としての集客など、今プロジェクトで見つかった課題も多いと土屋さんは言う。だが、3年をかけて将来の古典ともなりうる「現代の沖縄芝居」が誕生したことは紛れもない事実だ。(鈴木理映子)